

東京の商店街からも開拓団に参加したのだ！

—「こや定ふれあいスクール」に参加して—

吉川 雄作

去る3月17日、「こや定ふれあいスクール」なる催しに、当会参与の奥村氏らとともに参加した。「こや定」が「都立小山台高校定時制」の略称と知るまで少し時間がかかった。

その「こや定」では、「——生徒の生きる力を高め、人権の尊重、多文化の理解、市民の育成、国際平和をテーマに特色ある教育活動を実施——」（案内文より）を謳っている。

今回のテーマは「東京の満蒙開拓団を知ろう ～武蔵小山商店街と戦争～」で、教育活動＝授業の一環としながら一般市民にも見学を呼びかけて実施されたものだ。講師の一人に、奥村氏と私も加わる「ちば中国帰国者支援交流の会」の会長であり、日本中国友好協会理事でもある飯白栄助氏が、開拓団体験者として招かれている。

初めに視聴覚教室で、NHKが2009年8月9日に放送した番組「証言記録 市民たちの戦争 強いられた転業 東京開拓団 ～東京・武蔵小山～」のビデオを見た。これには戦前この地で成育した飯白氏自身が、七歳上の実姉飯白タツ子さんとともにインタビューに応える形で出演している。私はこの番組を見ていなかったの、初めて飯白氏と小山商店街との関係を知ることとなった。

ついで、会場を近くの小山台会館に移し、まず、「東京の満蒙開拓団を知る会」の藤村妙子さんによる「東京の満蒙開拓団」の歴史・実態について、各種資料を投影しながら詳細な説明がなされた。その内容は、私にとって「目からウロコ」というより、その全てが初めて知る事柄で、まさに驚きの連続であった。続いて、飯白氏と同じく開拓団体験者であった森沢義雄氏の体験談が語られた。

「満蒙開拓団」＝「長野県泰阜村」・「大地の子」程度の固定観念しかなく、他の地からあっても、農村からの入植とばかり思っていたが、東京の商店街からの入植もあったこと、しかも半強制的に閉店に追い込まれ、入植させられたという事実、農業未経験入植者のための訓練機関が設置されていたこと、いくつかの教育機関や宗教団体が積極的な役割を果たしていたという事実なども、初めて知り得たことであった。いずれも「国策」の名の下に推し進められたのであった。

小山台商店街は、都内でも有数の歴史を持ち、いわゆる「シャッター商店街」化が多い昨今、変わらぬ賑わいを保っている商店街の一つとして知られているが、ここにも空襲などとは別に、「戦争」と深く関わる歴史があったことを知り、満蒙開拓団といえば、とかくソ連参戦後の逃避行の悲惨にばかり目を向けがちだが、入植に至る経緯を知ること重要なこと、との思いを深くした。

また、付加的なことだが、こうした内容の「授業」が「都立高校で」行われているとい

う事実を目の当たりにすることができたことも、かつて教員であった私には爽やかな驚きであった。「こや定」の先生方（校長を含む）と「知る会」の方々の信念・熱意と苦心に、心から敬服申し上げる（生徒用の「満蒙開拓団資料」には、全ての漢字にふりがなが付けられていた）。

こうした地道な活動を広げていくことにより、一般庶民にとっての「戦争の実相」をしっかりと伝えて行くことが、声高に「道徳論」を叫ぶよりもはるかに今日的価値があることと考える。

そうした意味で、この催しは、私にとっても極めて有意義な「授業」であった。

（よしかわ・ゆうさく：1937年 札幌市生まれ。都内私立高校で国語科教員として勤務。定年後、中国語学習を開始。2006年の方正訪問（会報第3号参照）を含め、中国旅行6回。ちば中国帰国者支援交流の会事務局員。「千葉の干潟を守る会」等自然保護活動にも関る）